

## 諫早湾開門せず—司法を放棄した最高裁判所—

諫早湾は干満の差が数メートルもある豊穰の湾であり、干潟であった。魚介類の“ゆりかご”として卵や稚魚を育み、水質を浄化するなどの「生態系サービスは1日当たり1億円」と評価されていた。二枚貝のタイラギは高値で取引され、若者はタイラギ漁師を競って後を継いだという。

農水省は諫早湾を、総工費2800億円で、干拓して農地を造成した。湾を「ギロチン堤防」で締切り、陸側の湾を「調整池」とした。ここに河川水を貯留し、農業用水に使うという。1997年の堤防閉切り後、何がおこったか。

調整池の農業用水は、アオコの大発生により肝臓毒の猛毒ミクロシスチンが生成され、腐り始めた。隣接する海水の湾のノリや魚介類の生産は激減し、湾に漏れ出たミクロシスチンは魚介類の摂食がはばかれるほど高濃度に検出された。また、調整池の水を使ったコメからも検出された（高橋徹2015）。さらに、タイラギ漁師はかつての100軒が今や1~2軒に激減し地域の過疎化が始まった。

堤防閉め切りがアオコの大発生の原因であると主張する漁業者の訴えを認めた福岡高裁は、2010年開門を命じた。このとき国は上告を断念した。とうぜんの断念である。しかしながら、干拓農地の農業者の訴えを認めた長崎地裁は、2013年「開門せず」とした。判決に従うことを強制するために、「間接強制金」を漁業者に、つづいて農業者に毎日45~49万円の税金を払いあう醜態を演じた。そして今年、2019年6月、最高裁は「開門せず」として漁業者敗訴が決った。

コメ余りの時代に、1ha当り4億円も税金を投入して農地を造成し、魚介類などのグルメ嗜好の時代に豊穰の湾と干潟を破壊する。この明らかな税金の無駄遣い、環境破壊の責任を誰もとらないのである。最高裁の司法放棄を誰も問わないのである。

このような農水省と利権集団そして司法を放棄した最高裁を免罪することは「持続的」な社会を否定し、「公正さ」を踏みにじることになる。

瀬戸昌之（支える会代

表)



### ミニコラム

- 1.アナウンサーが、「.....速度が高い」と言ったら、テロップでは「.....速度が速い」と修正（??）していた。
2. 「いちばんベスト」を笑っていたが、ついに「いちばんベター」ときた。

これ間違いではないですね。負けました。

瀬戸昌之